<協同のひろば>

地域にひろがる「協同」の息吹き

―中高年雇用・福祉事業団（労働者協同組合）の現場から―

塚本一郎（協同総合研究所事務局）

中高年雇用・福祉事業団（労働者協同組合）センター事業団は、全国各地の事業所から本部に送られてくる情報を集約・編集し、それを「ほっとらいん」として1日おきに各事業所に送りとどけている。また、事業団全国連合会は月2回「じぎょうだん新聞」を発行し、団員（組合員）と本部、団員どうしの情報の交流をはかっている。

今回はその最近の記事のなかからいくつか、事業団の現場の「春の息吹」を拾ってみた。（以下、記事を抜粋し要約）

◇　◇

生協で高まる事業提携への期待

センター事業団の事業所といばらきコープ（美野里町）、京都生協物流センター（滋賀県栗東町）との大規模な提携の成功がきっかけとなって、今、全国の生協の幹部の中で労働者協同組合への期待が高まっている。

《九州》

九州の8生協をつなぐ機関「8連帯」は、61万の組織を1つに統合する「コープ九州」の設立を6月に予定。そのなかで3万坪の土地に2000億規模の物流センターを作ることを計画している。この計画に向けて生協の幹部からぜひ、この物流センターを事業団の実験場にという話が出ている。福岡のエフコープからは、リビングセンターでのカタログ販売の受注業務や物流センターの仕分け業務、さらにPCセンターや共同購入システムの設計に団員が挑戦していこうという話、コープながさきからも物流業務の話が出ている。また、鹿児島では店舗日配の物流業務の委託の話が生まれている。

《各地で》

和歌山の市民生協からは「ぜひ、京都・栗東の資料を見せてほしい」ということから全面委託の方向に話が進んでいる。また、同じように埼玉北部市民生協でもセンター長から全面委託の提案が出ている。また、3月21日からさいたまコープの現場では冷蔵フレッシュの仕分け業務を開始。

各地で事業団と生協との事業提携の芽生えが見えだしいる（「ほっとらいん」3月3日号より）。

好調！「愛らんど」

センター事業団は伊豆七島との連絡口、竹芝桟橋の「東京愛らんど」で2月17日から喫茶・飲食業務を団員2人で開始。なかなかの好評で立ち上げて10日足らずで、もう2号店の話が出ている。

オーナーから「本当に一生懸命やってくれますよ。できれば、もう一つのレストランも事業団にやってもらいたいな」という話も。この信頼も団員が島の特産の〝明日葉（あしたば）〟を使ったメニューを次々と考案したことから生まれたもの。〝あしたば茶割り焼酎〟、〝あしたば茎の味噌がけ〟、〝あしたばのミックスベーコン巻き〟などのオリジナルのメニューが盛りだくさん。「毎日同じメニューじゃ飽きちゃうから」と夜10時、店を閉めてから残って研究することもある。

来客には、島へ観光で渡る人が多く、自然に話が弾む。洒落（しゃれ）た制服の左胸に刻まれた〝ワーカーズ・コープ〟の文字について質問されることも多い。そんなときは「営業の練習だと思って名刺を渡し、自分なりに事業団のことを話すんです」とのこと。

そんな努力の甲斐あってお客さんからも「休みの日に、また来ますね」とか「うまかったから、もう1回来るよ」と喜んでもらっている（「じぎょうだん新聞」第253号、3月15日より）。

医療・福祉における協同

《共同作業所との提携》

東部緑化事業所では、足立区の保健衛生課から「書類の封筒入れの仕事の指名入札にぜひ事業団も参加しないか」との連絡を受けて、「やるかどうか」を全員で話し合う。「小さいけれど受けて、仕事をほしがっている共同作業所とタイアップしてやれば、新しい展開になるのでは」ということに。さっそく見積もりを提示し、28万で受注。「ぜひがんばってやれや！」と担当の係長からも激励を受ける。2月20日には足立区の花畑共同作業所を訪問。所長から厳しい運営の状況を聞く。足立区の封入れ作業の話になり、作業所に50万円もする紙折機があることがわかって引き受けてもらえることに決まる。また、作業所で作っているお菓子（マドレーヌ）を竹芝の「愛らんど」のメニューに加えられる可能性があることを提案。「それが実現できれば現状を克服できる。現在の厨房施設を大きくしなければ」と所長に喜んでもらえた。東部の事業所に、草刈りだけの仕事から小さいが新しい展望が見えてきた（「ほっとらいん」2月26日号より）。

《夜間ヘルパー、オムツの宅配》

センター事業団の東京健生・小豆沢事業所の清掃団員が、提携先の柳原病院で夜1時間のヘルパー事業を始めている。

これは健生・小豆沢事業所長の矢吹さんが柳原病院が中心となっている在宅医療学習会に参加したのがきっかけ。「住みなれた自分の家で死にたいという患者さんの希望を大事にしたい。夜、もう1回だけオムツを換えてくれる人がいたら退院して家で生活できる人がたくさんいる」という話を聞いた矢吹さんが「うちの団員がとりくめるのでは」と話し、さっそく団会議で提案。会議では「命にかかわることだし、もしものことがあったら責任が…」、「赤字になってまでやるわけにはいかない」という意見、それに対して「事業団は地域の役に立つ仕事をやろうと言ってきたが、これといったこともできなかった。そんなことばかり言ってないで、とにかくまずやってみよう」という意見も出た。最終的には事業のメドがつきそうだし、病院にとっても患者さんの様子が毎日聞けるメリットがあるのではということで、ヘルパー事業を開始。病院長からも「夜間とか日曜日のヘルパーは、どんどん要求が高くなっているが、労働組合との合意ができない。大変だけれども、ここに飛びこんでいこうという事業団の姿勢に本当に期待している」と高く評価されている。

また、同事業所の健生病院売店現場では、紙オムツの宅配構想も出ている。

健生病院ではもともと売店がなかったのを、団員の提案で1昨年の7月から開店。ここの特徴は紙オムツの種類が多く、それも体型や症状のちがう患者さんの要求に合わせて仕入れていること。東京でもトップクラスという評価を得ている。

そんな売店業務のなかから「宅配ができたら、患者さんのためにもなるし、この事業ももっとひろげられるのに…」という、団員の思いが生まれ、現在、市場調査や宅配の人手の確保を始める準備にとりかかっている（「じぎょうだん新聞」第253号、3月15日より）。

地域の事業所が「協同」の懇談会

3月4日夜、センター事業団埼玉西部事業所は、「新座の協同を考えてみる懇談会」を開催。当日は急な呼びかけだったが上福岡市福祉課や新座市福祉課の職員の方たちと富士見共同作業所長、事業団の団員ら8人が参加。参加者のなかからは、「こんな組織があることは知らなかった。人に雇われない、自分たちで運営できる事業、しかも人に感謝される事業があるなら、やりたい人はいっぱいいるだろう」、「もっと地域のなかに出て、旗を立て、組織し運動することが必要じゃないか」と。また、「資本と労働とのあり方は労働組合そのものが対決という図式で存在している。それを超えうるものにできるのか。最終的な目標は社会の改革なのか」などの論議がなされ、「これを機に月1回程度（懇談会）をやれないか」と話し合った（「ほっとらいん」3月10日号より）。